

家庭におけるポジティブな行動マネジメント：3人の父親による事例研究  
Positive behavior management at home : three fathers' case studies

○田中清章・大山茂之・勝瀬秀成  
Kiyofumi TANAKA, Shigeyuki OYAMA, and Hidenari KATSUSE  
鳴門教育大学大学院

Education for Handicapped Children in Graduate School of School Education, Naruto University of Education

島宗 理  
Satoru SHIMAMUNE  
法政大学  
Hosei University

1. 目的

部屋の整理整頓、衣服や食器の後片付けなどが苦手な子どもたちに対する指導はどうあるべきだろうか。本研究では、小学校に通う健常児を対象に、3人の父親がそれぞれの家庭で生じている子どもの片づけ行動の問題点を行動分析学の視点から検討したうえで、親子が楽しみながら取り組めるポジティブな解決方法を提案する。

2. 方法

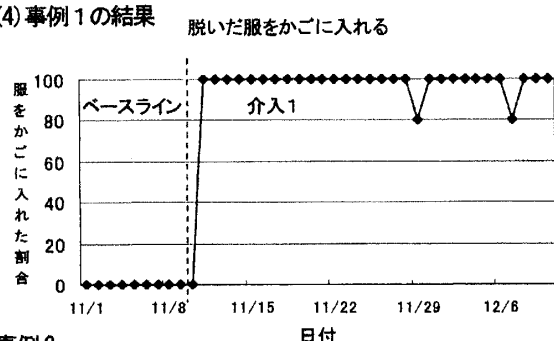
事例1

(1)対象児 A児(CA,9:6)は床に衣服が散乱していても、全く気にならない状態であった。

(2)標的行動「脱いだ服をかごに入れる」

(3)手続き 1)ベースライン期 脱いだ服を1ヶ所にまとめて置いた服の枚数を観察した。2)介入期 脱衣所にかごを置き、脱いだ服をかごに入れるよう促した。服をかごに入れると脱衣所の床がきれいになった状態を賞賛した。

(4)事例1の結果



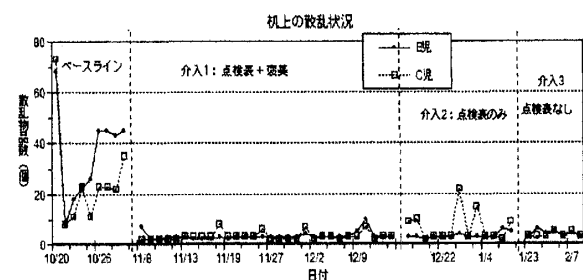
事例2

(1)対象児 B児(CA, 7:1), C児(CA, 8:6)は整理整頓が苦手で、机や床には文房具や玩具が散乱している。相当強く叱責しない限り、部屋の整理整頓をしない。

(2)標的行動 「自主的な部屋の整理整頓」とした。「机に散乱する物品数」と「父親の声かけなしに整理整頓を行った回数」の累積を従属変数として測定した。

(3)手続き 1)ベースライン期 父親は対象児に普段と同じ対応をした。2)介入期 不要品を捨てて片付ける場所を確保するなど環境の整備を行った。また「片付け点検表」を導入して記録をとり、基準日に達していれば週末に「ご褒美」を与えた。「ご褒美」と「点検表」は介入後期に消去した。

(4)事例2の結果



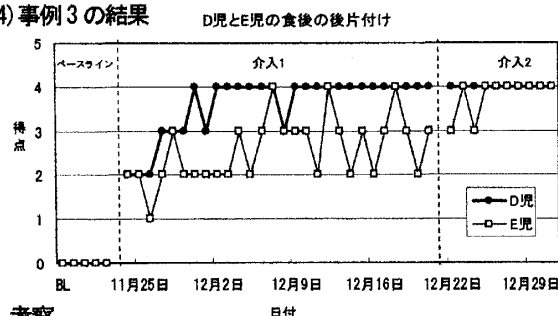
事例3

(1)対象児 D児(CA,11:3) C児(CA,7:1)は「食後の後片付けが面倒くさい」、「見たいテレビ番組がある」等の理由で自主的に食器の片付けができない状態であった。

(2)標的行動「自分の使った食器を自主的に片付ける」とした。自主的な片付けを2点、言語プロンプトによる片付けを1点、片付けなしを0点としグラフのY軸に朝夕の合計得点を記録した。

(3)手続き 1)ベースライン期 朝食後、夕食後の食器の片付けを観察した。2)介入1期 食後、食器を流しに運ぶよう言語プロンプトを出し、できたら賞賛し行動を強化した。言語プロンプトはフェードアウトし、自主的にできた場合にはより大きな賞賛を与えた。3)介入2期 冬休み期間中の学校の課題と併用して実施した。

(4)事例3の結果



3. 考察

事例1では、かごを置くことで服を入れる場所が明確になった。また、褒められることで床が綺麗になった状態が習得性好みとなり、かごに服を入れる行動が行動内在的随伴性で維持されたと考えられる。

事例2では、片づけやすくするための環境整備が効果を発揮した。また、点検表と褒美を消去した後も対象児の片付け行動が維持された。事例1と同様に、これは机上が片付いている状態が習得性の好みになったためだと考えられる。

事例3は、D児は賞賛が好みとなり自主的な片付けができた。E児は介入1で賞賛が好みとなり食器の片付けはできたが、自主的な行動は連続で生じなかった。介入2によりE児の自主的な行動が増加したのは、宿題カードに○印をつけること、学校の先生に褒められることが好みになったと考えられる。

これまで家庭での子どもの日常的な問題行動に対しては、叱責等のネガティブな方法が安易に選択されることが多かった。しかし、3つの事例からは、子どもの問題点を分析して環境を整備し、適切な対応策を用いることで、親子がともに楽しみながら問題を解決できることが示された。